

## 序

アジア・太平洋戦争をへた戦後考古学・歴史学は、津田左右吉つくださうきち以来の記紀神話の史料批判や文化財として天皇家を考えることを学問的な営為としてきた。なかでも陵墓となる古墳（天皇陵古墳）に対して、考古学や歴史学の一〇学会（現在、一六学協会）による一九七六年五月に始まった陵墓公開運動は、皇室用財産として閉ざされた宮内庁陵墓から文化財として市民に開かれた巨大古墳を取り戻す運動であった。

その一つの象徴が、戦後考古学の成果にもとづいた現在の陵墓比定への森浩一による疑義の表明であり、つづいて提出された現行の陵墓呼称から日本考古学における通常の遺跡命名法による古墳呼称への言い換えである。これは、記紀系譜にもとづく陵墓の存在を前提に、『延喜式』記載の陵墓名を採用して体系づけた近代国家による陵墓制をほぼ踏襲した戦後のありかたに対する根本的な批判となる。森による仁徳陵にんとくを大山古墳だいせん、応神陵おうじんを菅田山古墳くんだやまと地名で呼ぶ提案は、考古学・歴史学の学問上の到達点にもとづく合理的なものであったため、たちまちに学界はもとより広く市民に支持され、教科書記述にも反映をみることになる。

しかし二一世紀に入り持ちあがった、天皇陵古墳を含む「百舌鳥もず・古市古墳群ふるいち」の世界文化遺産登録を目指す活動では、関連機関においてその構成資産名が、森提案による天皇陵古墳の呼称方法の妥

当性およびその定着する実態を考慮せず、一方的に「仁徳天皇陵古墳」「応神天皇陵古墳」などと決められた。これは当該する陵墓（天皇陵古墳）に対して文化財保護法による史跡指定を行ない保存施策を講じた上で、世界遺産登録を図るというのではなく、国有財産法の皇室用財産として宮内庁が管理する現行施策において恒久的な陵墓の保護等が満たされているという認識に立ったものである。

ついでには、陵墓の文化財的性格は文化財保護法上の「埋蔵文化財包蔵地」にとどまるという見解が導かれることになる。文化財保護法では、文化財の定義のうち古墳などの遺跡で「わが国の歴史上又は学術上価値の高いもの」を記念物とし、文部科学大臣は、なかでも重要なものを「史跡」、特に重要なものを「特別史跡」に指定することができる。構成資産となる百舌鳥・古市古墳群の天皇陵古墳は、この要件を満たしていないのだろうか。陵墓に文化財としての性格を認めるならば、その実質化ともいふべき史跡に指定され、顕彰の対象になるものと考ええる。さらに古墳群としてとらえるのであれば、周辺開発に対して許認可権が行使される史跡指定が必須だろう。「仁徳天皇陵古墳」「応神天皇陵古墳」などといった呼称の背景には、このように指定行為をとらないといった問題点がある。

さらに、「百舌鳥・古市古墳群」の世界遺産登録が五世紀の倭国王墓となることを根拠とする一方で、宮内庁による現行の陵墓比定と折衷させたかのような表記は、戦後、構築してきた日本考古学・歴史学の学知を否定するばかりか、市民や世界に対する誤った情報発信につながる危険性すらある。「天皇」号が五世紀には存在しないこと、現行の陵墓比定に多くの誤りがあることは、研究者の間では広く共有されていたはずである。わが国の国家形成史を歪曲した責任は、将来にわたって問われるもの

となろう。また、これは明治期以来の宮内省(庁)管理の陵墓の「秘匿性」を温存することにもつながる。陵墓の体系とは、「万世一系」の記紀系譜を視覚化したものであり、「仁徳天皇陵古墳」「応神天皇陵古墳」という呼称は、記紀系譜にもとづき仁徳陵・応神陵と呼ぶことと本質的に変わらない。それはわが国によるアジア・太平洋地域への侵略と植民地化の反省の上で、アジア各地域の人々との歴史観の共有化をめざすという立場を明確にした呼称として「アジア・太平洋戦争」と呼ぶのか、大東亜共栄圏の構築過程における欧米諸国からの祖国防衛のための聖戦と位置づけて「大東亜戦争」と呼ぶのかに、同質の課題として受け止めるべきではないだろうか。

本書は、考古学、歴史学研究者として世界遺産登録活動により表面化した天皇陵古墳呼称問題を看過せず、直視し、何が問題であり、どうすれば未来につながるかを問う一書として企画した。記紀系譜への批判を回避した天皇陵古墳の表記を問題視し、世界遺産登録の問題を相対化する視点から、これからの天皇陵古墳の在り方について考古学・歴史学・ジャーナリズムから考えてゆきたい。

なお、挿図となる写真や図の掲載については多くの機関や関係者にご協力をいただいた。また英文要旨の作成については、ジェニファー・シャンムガラトナム氏、ジョン・ブリン氏に、さらに刊行については、思文閣出版の田中峰人氏のお世話になった。ここに厚くお礼を申し上げたい。

二〇一六年十一月十五日

今尾文昭

高木博志

序

第Ⅰ部 呼称問題

第1章

天皇陵古墳をどのように呼ぶか

——森浩一の軌跡と先駆的役割——

今尾文昭

3

第2章

百舌鳥三陵は如何に呼ばれてきたか

久世仁士

31

第Ⅱ部 歴史のなかの天皇陵古墳

第3章

古市・百舌鳥古墳群の王陵の被葬者

岸本直文

63

第4章

王統譜の成立と陵墓

仁藤敦史

87

第5章

だれが陵墓を決めたのか？

——幕末・明治期の陵墓考証の実態——

上田長生

109

第6章 大正・昭和戦前期の学問と陵墓問題

高木博志 129

第Ⅲ部 現代と天皇陵古墳問題

第7章

陵墓と文化財「公開」の現在

——デジタル時代の文化財情報の公開の姿とは——

後藤 真 159

第8章

教科書の天皇陵古墳

新納 泉 181

第9章

陵墓公開運動と今後のあり方

茂木雅博 201

第10章

世界遺産は陵墓を「開かせる」か

——報道の立場から——

今井邦彦 237

まとめ

古市古墳群の主要古墳

百舌鳥古墳群の主要古墳

英文要旨

索引（人名・事項）

執筆者紹介

### 三 天皇陵古墳に向けて考古学からの呼称

#### (1) 呼称変更の提唱

森が陵墓名の便宜的呼称である「仁徳陵」といった呼称が不適正であると世に問うのは、『シンボジウム古墳時代の考古学』（学生社、一九七〇年六月）のなかでの発言が最初だろう。序文の日付は六年一月とある。関係箇所を引用しておこう。

天皇陵の問題に入るのでありますが、こういうことを一つ提案したいのです。つまり、われわれが「仁徳陵」とつかう場合は、暗に何か、仁徳天皇の陵墓だとみられているような発言になる。だから、それが考古学的に疑問のある時は、「仁徳陵古墳」とうしろに古墳をつければよかろうと、だから天武・持統の場合は、ほとんどたがいがいがないので、その場合は天武・持統陵でよかろう。その方が考古学者が崇神陵とみとめたなどと誤解されないから、ごめんですが、多少なりとも疑問をもっているものは「古墳」とつけていただきたいのです。

シンボジウムは、森が司会をした。東京で一回、長野で二回にわたり収録された。東洋史の重鎮でもあった三上次男以外の出席者は、関東から甘粕健、大塚初重、九州から小田富士雄、岡山から間壁忠彦といった森とほぼ同世代の全国各地で活躍する古墳研究者であった。

森は本書の編集者でもあった。提案以降の出席者の発言には、陵墓呼称のあとに「古墳」が付けられている。森提案の現陵墓の呼称変更は、たちまち広く支持されることとなる。たとえば、一年後に

発表された石部正志・田中英夫・堀田啓一・宮川徭「古市・百舌鳥古墳群における主要古墳間の連関規制について」（『古代学研究』第六〇号、一九七一年）は、両古墳群における超大型前方後円墳と周辺の古墳の配置関係を検討した論文だが、大山古墳は仁徳陵古墳（以下、「仁徳陵」と略す）、誉田御廟山古墳は応神陵古墳（以下、「応神陵」と略す）などと記している。

ここで見過ごせない点がある。森が、呼称問題に際して例にあげたのが、欠史八代につづく第一〇代の崇神陵とした点である。前著『古墳の発掘』中公新書、一九六五年）では、欽明陵の現治定への疑問を表わし、丸山古墳を欽明の真陵とすることを主張したが、陵墓そのものの呼称変更へ注意が及ぶことはなかった。ところがシンポジウムでは、「一部の人が敗戦以来も考えているひとつの側面は、神武から開化まではダメだという場合の防波堤として、せめて崇神から後は信じたいという……」、さらには「政治上の大権力者がいたことが、考古学的に言えても、それが、必ずしも特定の人物とは結びつかないとおもいますけれどもね」と述べている。崇神陵については「ハツクニシラス」の諡号に合致した内容が備わる古墳編年上の相対的位置にないことを強調する。すなわち前方後円墳の成立を「記紀」に示された崇神の国土統一の事績に結び付け、以降の「記紀」の記載に信頼性を与えるという立場に対して、現治定の奈良県天理市行燈山古墳は最古式の前方後円墳とは認められないという考古学上の検証を披瀝した上で、特定人物に直結する崇神陵から離れ、考古学の評価を盛り込める崇神陵古墳へと呼び方を変更した。

現治定への懐疑、曖昧さや旧態を墨守する現況の打開が、現陵墓による便宜的呼称に「古墳」を付

けた真意であり、それが疑問のあがる天皇陵全体に及ぶことを意図していたことがよくわかる。

『シンポジウム古墳時代の考古学』刊行直後も、天皇陵の呼称についてのこだわりを示す一文がある。「失われた畿内の古墳」〔『歴史読本』一九七一年六月。のちに同名タイトルで『古墳文化小考』三省堂新書、一九七四年に再録〕に「見瀬丸山古墳がなによえ欽明陵であるかという根拠はここでは省くけれども、もしそうだとすると当然問題になるのは欽明陵古墳（古くは梅山といっただので以下梅山古墳の名称を使用）はいつごろの古墳かということである」という断りを括弧内に記す。森が天皇陵も現陵墓名ではなく、近代以前の古称によるという考古学の一般的な遺跡呼称方法を採用した初期の事例としてあげておきたい。

## (2) 適正な呼称の模索

欽明陵を梅山古墳の名称で呼んでから、およそ一年半後に、仁徳陵に対する適正な呼称を引き続き模索していたことを示す文章がある。「天皇陵への疑惑」〔『流動』一九七三年一月号。のちに同名タイトルで『古墳文化小考』三省堂新書、一九七四年に再録〕である。

古墳の研究というと、すぐ発掘かとおもう人があるが、発掘は医学でいう解剖に相当し、墳丘の土の盛り方や、葺石の大きさや種類を見るだけでも、多くのことがわかるのである。たとえば日本最大の前方後円墳として知られている、大阪府堺市にある大山陵（仁徳天皇の陵に治定されている）でも、墳丘の上に立って実際に見た研究者はおそらく十名前後ではなからうか。草刈りや

184, 186, 189, **192**

ゆ

URL 170  
有功臣墓 90, 93  
ユネスコ 251

よ

係役 99  
ヨーロッパーナ 169

り

履中陵、——古墳→百舌鳥陵山古墳  
『流動』 17  
陵戸(守戸)  
33, 90, **91**, 92, **94**, 95, 99, 107  
『陵墓一隅抄』 46  
陵墓関係学会 59  
陵墓管理委員会 255  
陵墓考証官 151  
陵墓祭祀 102, **104**, 106  
陵墓参考地 147, 237  
『陵墓志』 **43**  
「陵墓」指定古墳の文化財保護法適用  
を要望する決議 202  
陵墓制度 **90**, 104  
「陵墓」の保護と公開を要求する声  
明 204  
臨時陵墓調査委員会 141, **146**, 147  
『臨時陵墓調査委員会資料』 146

れ

歴史科学協議会 204, 206, 226  
歴史学研究会 204, 206, 210, 226  
歴史教育者協議会 210, 226  
『歴史地理』 6  
歴代遷宮 103

わ

ワカタケル大王 184  
倭の五王 **101**, 104, 254

	202, 204, 206, 209, 216, 226
文化審議会	251
『文久改正堺大絵図』	50, 51
文久の修陵	111
へ	
平城京	88, 89, 94
平城陵、——古墳→市庭古墳	
舳之松村	36
ほ	
奉仕根源	106
墓戸	90, 92
墓誌	59
墓守	92
ま	
前の山古墳(軽里大塚古墳・軽墓前 之山古墳・白鳥陵古墳)	109, 110, <b>115</b> , 242
学び舎	188
丸保山古墳	242
丸山古墳	12, 15, 242
円山陵墓参考地	151
み	
三島藍野御陵ニ関スル提議	140
三島藍野陵真偽弁	140
見瀬丸山古墳	131, 152, 197
水戸藩	121
峯ヶ塚古墳	253, 256

む	
向墓山古墳展示室	256
め	
目で見る王統譜	91
も	
殯	103
百舌鳥・古市古墳群	4, <b>63, 76</b> , 237, 251
百舌鳥大塚山古墳	33
万代御廟	51
百舌鳥御廟山古墳	248, 253
百舌鳥古墳群	31, 110
百舌鳥三陵	<b>31, 34, 35, 48, 52, 55</b>
万代ノ社	51
百舌鳥八幡宮	51
百舌鳥陵山古墳(石津ヶ丘古墳・上 石津ミサンザイ古墳・履中陵)	32, 51, 78, 190, 194, 201, 224
百舌鳥耳原北陵	31
百舌鳥耳原中陵	31
百舌鳥耳原南陵	31
木簡データベース	167
や	
山川出版社	176
山田上ノ山古墳	41
山田高塚古墳	224, 229, 232
ヤマト政権・大和政権・大和朝廷	

東寺百合文書Web	167
ドーナツ指定	207
『読山陵外史徴按』	122
戸田家文書	210
鳥屋ミサンザイ古墳	57

な

仲津媛陵→仲津山古墳	
仲津山古墳	78, 162, 242
難波高津宮	33
奈良文化財研究所	168, 256
奈良歴史研究会	204, 206, 226

に

ニサンザイ古墳	
→土師ニサンザイ古墳	
西殿塚古墳	224
日本考古学協会	203, 204, 206, 209, 212, 213, 217, 218, 223, 224, 226, 227
日本史研究会	204, 206, 226
『日本輿地通志畿内部』	39
日本歴史学協会	226
入道塚陵墓参考地	151
仁徳天皇陵古墳、仁徳陵古墳	
→大山古墳	

の

野口王墓古墳	12, 131, 219, 243, 251
荷前	90
能褒野陵	109

は

陪冢	237
ハイマートシュッツ(郷土保存)	144
墓山古墳	242
白鳥陵古墳→前の山古墳	
箸墓古墳	188, 224, 247, 251
土師ニサンザイ古墳	27, 33, 80, 160, 210, 245, 246, 249
ハツクニシラス	15
埴輪	64
万世一系	87
版築	229

ひ

日嗣	100~106
檜隈大内陵	12, 152
ピラミッド	87
殯宮儀礼	104

ふ

深草十二帝陵	226
副系列墳	64
藤井寺市生涯学習センター	256
伏見城	224
藤原京	88, 89, 91, 93, 96, 98
二子山古墳	152
父母双系	96
古市古墳群	110
文化財保護法	242
文化財保存全国協議会	

太皇太后	57	長慶天皇御陵伝説箇所関係書類審議	
『大乘院日記目録』	149	一覽	148
大成洞古墳群	65	長慶天皇陵	130, 131, <b>146</b> , <b>149</b> , 153
大山古墳(大仙古墳・大山陵・大山陵古墳・大仙陵古墳・仁徳天皇陵古墳)		直系尊属	96
3~5, <b>6</b> , 8, 9, 14, 15, 17, <b>18</b> , 21, 25, 31, <b>32</b> , <b>54</b> , <b>70</b> , 87, 132, 161, 174, 175, 181, 183, 190, 194, 224, 238, 247, 249, 252, 255			
大宝令	<b>91</b> , 92~94, 96, 98, 107	つ	
高松塚古墳	160, 243, 255	塚廻古墳	8, 253
——壁画	9, 246	津堂城山古墳	69, 246, 253, 256
高屋築山古墳	226		
高鷲丸山古墳	232	て	
丹比柴籬宮	33	TG232号窯	67
田出井山古墳	27, 28, 34	TK23型式	70
タブーの天皇陵	11	TK47型式	70
多聞城	224	TK73型式	68
丹下城遺構	229	TK208型式	70
段ノ塚古墳	246	TK216型式	70
淡輪ニサンザイ古墳	57, 118	帝紀	
		95, 96, 98, <b>99</b> , 100, 101, 103~106	
ち		寺山南山古墳	69
地位継承次第	101	天寿国繡帳銘	105
近つ飛鳥博物館	176, 256	『天皇記』	105, 106
乳岡古墳	47	天皇御物	204
地方史研究協議会	204, 206, 226	『天皇陵古墳』	26
冢	57	天皇霊	102
兆域	99	天武・持統合葬陵(大内陵)	
『長慶天皇御即位の研究』	130	6, 94, 96, 131	
		天理大学	201
		と	
		東京文化財研究所	256
		陶質土器	<b>65</b>

	139, 144, 146
常墓守	91, 93
常陵守	91~93
職位継承	103, 105
女帝	104
自余の王等の有功者	92, 98
諸陵司	90
『諸陵周垣成就記』	<b>37</b>
『諸陵説』	113
『諸陵徴』	113
『書陵部紀要』	163, 244
書陵部所蔵資料目録・画像公開シス テム	170
諸陵寮	90
白髪山古墳	213, 216, 226, 230, 246
城山古墳	242
新池遺跡	134, 142
神祇省	115
神功皇后陵	99
神聖王墓	64
『シンポジウム古墳時代の考古学』	14
神武天皇陵	17, 93, 153

す

図書寮文庫	170
崇神天皇陵	31
隅田八幡鏡	73
播鉢山(摺鉢山)	36, 50

せ

『聖蹟図志』	<b>46</b> , 114
青年考古学協議会	201
成務天皇陵	99
世界遺産	154, <b>237</b> , <b>242</b>
——委員会	243, 251
——暫定一覧記載資産候補提案書	58
——条約	242
——登録推薦書原案	58
世界文化遺産登録	4, 29, 237
世襲王権	100, 107
世襲制	100
『摂州泉州堺町之図』	51
摂津総持寺々領散在田畠目録	138
「摂津国三島藍野陵と今城」	145
『全堺詳志』	<b>40</b>
全国遺跡総覧	168, 171
『泉州絵図』	51
『泉州志』	<b>38</b>
泉涌寺	133
『前王廟陵記』	32, <b>36</b> , 54, 55, 135
前方後円墳共有システム	63

そ

双系的系譜	105
外向きの軍事王	100

た

大化の薄葬令	91
--------	----

古都奈良の文化財	243
後鳥羽天皇火葬塚	232
御廟野古墳	226, 246
御廟山古墳	201
古墳祭祀	102, 103
『古墳と古代文化99の謎』	18
『古墳の発掘』	9, 10, 202
古室山古墳	256
御陵墓伝説地	153
御歴世宮址保表ノ建議案	137
誉田御廟山古墳(誉田山古墳)	
15, 17, 77, 135, 177, 190, 204,	
224, 252, 255	

さ

祭政分権王政	64
『堺絵図』	51
『堺大絵図』(元禄)	48
『堺大絵図改正綱目』	51
『堺鑑』	35, 54
堺市博物館	256
坂上山古墳	232
佐紀石塚山古墳	221, 249
佐紀陵山古墳	
57, 197, 218, 224, 226, 232	
ザビエル画像	144
『三帝陵東原天王社向井村絵図』	50
『山陵外史徴按』	122
『山陵考』	136
『山陵考略』	46
『山陵志』	45

『山陵図絵』	50
--------	----

し

四至畿内	98
史学会	204, 206, 226
始皇帝陵	87
四条古墳	89
四条塚山古墳	226
氏姓制	101
七観古墳	69, 201
執政王墓	64
科長大陵	95
誄	104
渋谷向山古墳	226
神明野古墳	23, 89
借墓守	91, 93
借陵守	91~94
一九世紀の陵墓体系	142
自由社	188
周知の埋蔵文化財包蔵地	244
主系列墳	64
首長霊	102, 103
順徳天皇陵	124
『上宮記』	104, 105
『上宮聖徳法王帝説』	100, 105
常称寺	138
『詳説日本史B』	176
正倉院	169, 243
『正倉院紀要』	169
正倉院宝物	170
『上代浪華の歴史地理的研究』	

京都民科歴史部会	226
教部省	115
浄御原令	92, 95, 99
金官国	65
近墓	90
欽明(系)王統	100, 104, 106
欽明陵古墳→梅山古墳	
近陵	90
<	
Google	169
Google Cultural Institute	169
櫛山古墳	228
宮内公文書館	170
宮内庁古墳	26
宮内庁書陵部図書課	170
宮内庁書陵部陵墓課	165
雲部車塚古墳	246
軍事王	104
け	
慶寿院趾	148~150
継体天皇陵、——古墳	
→太田茶白山古墳	
血縁継承	97, 100, 103
欠史八代	96, 98
原王統譜	101, 103
牽牛子塚古墳	195, 246
現地保存	144

こ

後一条天皇陵	124
功有りし王(の墓)	93
庚寅年籍	95
考古学研究会	204, 206, 209, 213, 226
『考古学雑誌』	7
皇国史観	193
高山寺	219
皇室典範	25, 57
皇室用財産	243
皇祖霊	102
皇太后	57
皇都	94
孝徳天皇陵→山田上ノ山古墳	
皇南大塚南墳	68
口碑流伝	142
『皇陵』(『岩波講座日本歴史』)	151
『皇陵』(『歴史地理秋季増刊』)	137
郡山陵墓参考地	153
黄金塚陵墓参考地	171
五社神古墳	224, 226, 233, 248, 249
『古事記伝』	116
『古事記』崩年干支	71
越塚御門古墳	195
五条野丸山古墳	197, 219, 231
後白河天皇陵	122
古代学協会	226
古代学研究会	204, 206, 216, 218, 226
国記	105, 106
古都京都の文化財	243

28, 70, 131, **134**, 142, 154, 195  
磐余稚桜宮 33

う

ウイキペディア **172, 177**, 178  
上野マリア墓石 144  
鶯塚古墳 41  
『打墨縄』 114  
宇都宮藩 111  
宇度墓 118  
梅山古墳(欽明陵古墳) 16, 106, 221

え

江田船山古墳 184  
『延喜式』 31, 87, 90, 92, 94, 96, 99,  
114, 130, 133, 135  
延喜陵墓式→『延喜式』  
遠墓 90  
遠陵 90

お

王系の交替 **101**  
応神五世孫 105  
応神天皇陵古墳外濠外堤 240  
応神陵(古墳) 9, 15, 17, 190, 194  
王統譜 27, 97, **99, 102**, 103, **104**,  
105, 107  
大内陵→天武・持統合葬陵  
ON46型式 70  
『大阪府史』 24  
大阪府史蹟調査委員会 145

大阪歴史学会 226  
太田茶白山古墳(継体天皇陵)  
28, 129, 130, 132, **134, 135**, 139

岡古墳 58  
岡ミサンザイ古墳 57, 81  
大庭寺遺跡 67  
帯解黄金塚古墳 171

か

『科学朝日』 22  
学習指導要領 184  
カトンボ山古墳 201  
上石津ミサンザイ古墳

→百舌鳥陵山古墳

『カラーブックス考古学入門』 18  
軽里大塚古墳 81  
河内大塚山古墳  
73, 224, 229, 231, 232

河内政権 **71, 77**  
官員令別記 91~93, 98  
『寛永泉州大絵図』 50  
勘注(勘註) 115, 129, 136, 140  
桓武天皇陵 124

き

キトラ古墳 255  
旧辞 98, **99**, 100  
旧石器発掘ねつ造 167  
旧全国総合開発計画 206  
京都府立総合資料館(京都府立京都  
学・歴史館) 168

や	
八代国治	130
安村俊史	70
山川正宣	46
山口鋭之助	140
日本武尊	56, 98, 109
倭姫	97
山之内時習	115

ゆ	
湯浅倉平	146
雄略天皇	81

よ	
用明天皇	100

り	
履中天皇	78
龍肅	147

わ	
ワカタケル大王	184
和田軍一	140, 143, 146, 151, 152, 154
渡部信	147

を	
ヲワケ臣	101

## 【事 項】

あ	
『阿不幾乃山陵記』	12, 152, 219
芥川城址	145
飛鳥・藤原の宮都とその関連資産群	243

新益宮→藤原京	
行燈山古墳	15, 31, 226
安楽寿院南陵	226

い	
e国宝	167
『藺笠のしづく』	113, 136
育鵬社	186
石津ヶ丘古墳→百舌鳥陵山古墳	
石舞台古墳	243
『和泉堺市図』	50
『和泉志』	39
『和泉名所図会』	42, 50
いたすけ古墳	47, 256
市庭古墳	23, 89
市野山古墳	79
稲荷山古墳	184
稲荷山古墳出土鉄剣銘	101
茨木城	145
いましろ大王の社	154
今城塚古代歴史館	154
今城塚古墳	

中山正暉	160
並河誠所	39

に

西川宏	28
西田直二郎	147
仁賢天皇	82
仁徳天皇(大鷦鷯天皇)	31, 40, 58, 78, 105, 119, 187

ぬ・の

糠手姫(田村皇女)	97
野本松彦	207

は

間人皇女	97
秦豊	207
浜田耕作	7, 141, 151
原田淑人	151
春成秀爾	7
反正天皇	31, 75
伴信友	113

ひ

東藤次郎	144
疋田棟隆	121, 129
彦五瀬命	98
菱田哲郎	135
敏達天皇	100
比婆須比売命	56
平塚瓢斎(津久井清影)	46, 113

広姫	96
----	----

ふ

藤波大超	144
藤原温子	152
藤原不比等	93
藤原宮子	56
武寧王	73
武烈天皇	105

ほ

細井知慎	37
ホムタワケ	58
堀田啓一	15

ま

間壁忠彦	14
松下見林	36, 135

み

瑞菌別(ミズハワケ)	40
宮川涉	15, 207
三好長慶	135

も

本居宣長	116, 136
森浩一	3, 5, 9, 10, 14, 21, 22, 24, 31, 84, 161, 176, 195, 202, 207, 221, 240, 241
文武天皇	119

聖徳太子(上宮王) 57, 105  
 白石太一郎 177, 188, 253  
 申敬澈 65  
 神功皇后 56  
 神武天皇 94, 96, 110

す

推古天皇 36, 95, 100  
 綏靖天皇 94, 96, 110  
 末永雅雄 24  
 崇峻天皇 100  
 砂川政教 208

せ

清寧天皇 81  
 関祖衡 39  
 関野貞 139

そ

蘇我氏 96, 106  
 蘇我稻目 105  
 蘇我入鹿 56  
 蘇我蝦夷 56  
 蘇我遠智娘 97

た

高木博志 114, 240  
 高志芝巖 40  
 高志養浩 40  
 高橋健自 6  
 竹口栄斎(尚重) 43

手白香皇女 96  
 田尻紋右衛門源重次 138  
 田中教忠 12  
 田中英夫 15  
 谷森善臣 35, 113, 121, 129, 136, 208  
 田村皇女 96

ち

茅渟王 96, 97  
 仲哀天皇 109

つ

辻善之助 147, 151  
 津田左右吉 100, 114, 142  
 角井宏 207

て

天智天皇 96, 97  
 天坊幸彦 130, 134, 138~140, **143**, 144  
 天武天皇 56, 90, 96, 97

と

外池昇 129  
 藤間生大 9  
 戸田忠至 113  
 訥祇王 68  
 豊城入彦命 152

な

中島乗彝 115

押坂彦人大兄皇子	96, 97
尾谷雅比古	129
小田富士雄	14
オホシ	82
オホヒコ	101

か

開化天皇	96, 110
海門承朝	150
上宮大娘姫王	56
蒲生秀実(君平)	45
軽大姫皇女	119
河田賢治	207
川端康成	144

き

岸俊男	93
北浦定政	113
喜田貞吉	6, 137, 143
堅塩媛	221
木梨軽(キナシカル)皇子	71, 80, 119
衣笠一閑(宗葛)	35
吉備姫王	96, 97
木村一郎	137
欽明天皇	96, 100, 105

く

草壁皇子	56
久保哲三	207, 212
倉西裕子	74, 75
黒板勝美	132, 141, 143, 147, 151, 154

け

景行天皇	109
継体天皇	73, 96, 97, 100, 105
顕宗天皇	82

こ

小出義治	207, 212
皇極天皇	97
孝元天皇	94, 96
孝徳天皇	96, 97, 119
河野太郎	255
光明皇后	56
孝明天皇	121
後光明天皇	133
後藤守一	8
小浜成	134
小林達雄	188
小林行雄	6
駒井和愛	8
子安信成	115

さ

酒井清治	67
桜井清彦	207
猿渡容盛	115

し

志貴皇子	56
持統天皇	96, 97
芝葛盛	147

# 索引

\*本索引は、本文中の人名・事項について重要度の高いものを検索するために作成した。したがって網羅的な索引とはなっていない。

\*採録語句が章・節・項の見出しに出てくる頁は太字にした。

## 【人 名】

### あ

秋里籬島	42
足立正声	140
甘粕健	14, 201, 207
安閑天皇	73
安寧天皇	94, 96

### い

飯豊皇女	57, 75
諫早直人	68
石田茂輔	212
石橋新右衛門直之	38
石姫皇女	96
石部正志	15, 28, 202, 207
イチノベオシハワケ王	71, 79
伊藤武雄	152
懿徳天皇	94, 96
五十瓊敷入彦(命)	57, 98, 118
今井貫一	143
今井堯	207

今尾文昭	244
磐隈皇女	97
岩崎卓也	207
石前皇女(磐隈皇女)	96, 97
允恭天皇	75, 119

### う・え

上田長生	129
宇佐美毅	207
菟道稚郎子(ウジノワキイラツコ)、 菟道太子	36, 71, 98
梅原末治	17, 22
江上波夫	8

### お

応神天皇	72
オオサザキ	58
大沢清臣	119, 129, 136
大谷正男	147
大塚初重	14
大伴皇女	96, 97
大橋長熹	119, 129, 136
大俣皇女	96, 97
荻野伸三郎	141, 147

※高木博志（たかぎ ひろし）

1959年生。立命館大学大学院文学研究科博士後期課程修了。京都大学人文科学研究所教授。

『近代天皇制の文化史的研究——天皇就任儀礼・年中行事・文化財』（校倉書房、1997年）、『近代天皇制と古都』（岩波書店、2006年）、『陵墓と文化財の近代』（山川出版社、2010年）。

後藤 真（ごとう まこと）

1976年生。大阪市立大学大学院文学研究科後期博士課程修了。国立歴史民俗博物館准教授。

『写真経験の社会史』（編著、岩田書院、2012年）、『アーカイブのつくりかた』（分担執筆、勉誠出版、2012年）、「人文社会系大規模データベースへのLinked Dataの適用——推論による知識処理——」（『情報知識学会誌』25-4、2015年）。

新納 泉（にいろ いずみ）

1952年生。京都大学大学院文学研究科博士課程学修退学。岡山大学大学院社会文化科学研究科教授。

「前方後円墳廃絶期の暦年代」（『考古学研究』56-3、2009年）、「6世紀前半の環境変動を考える」（『考古学研究』60-4、2014年）、「養田御廟山古墳の設計原理」（日本考古学協会編『日本考古学』39、2015年）。

茂木雅博（もぎ まさひろ）

1941年生。國學院大學文学部卒業。博士（歴史学）。茨城大学名誉教授。土浦市立博物館館長・奈良県立橿原考古学研究所特別指導研究員。

『常陸国風土記の世界』（同成社、2011年）、『箱式石棺』（同成社、2015年）、『楽石雑筆（補）』（書写・解説、博古研究会、2016年）。

今井邦彦（いまい くにひこ）

1967年生。京都大学文学部（考古学専攻）卒業。朝日新聞編集委員。

「百舌鳥・古市古墳群、世界遺産暫定リスト記載決定」（『歴史のなかの天皇陵』思文閣出版、2010年）。

■執筆者紹介（掲載順，※印は編者）

※今尾文昭（いまお ふみあき）

1955年生。同志社大学文学部文化学科文化史学専攻卒業。博士(文学)。関西大学非常勤講師。

『律令期陵墓の成立と都城』（古代日本の陵墓と古墳2，青木書店，2008年），『古墳文化の成立と社会』（古代日本の陵墓と古墳1，青木書店，2009年），『ヤマト政権の一大勢力 佐紀古墳群』（新泉社，2014年）。

久世仁士（くぜ ひとし）

1947年生。法政大学文学部史学科卒業。文化財保存全国協議会常任委員。

『泉州の遺跡物語』（和泉出版印刷，2004年），『百舌鳥古墳群をあるく』（創元社，2014年），『古市古墳群をあるく』（創元社，2015年）。

岸本直文（きしもと なおふみ）

1964年生。京都大学大学院文学研究科博士後期課程(考古学専攻)中退。大阪市立大学大学院文学研究科教授。

『史跡で読む日本の歴史2 古墳の時代』（編著，吉川弘文館，2010年7月），「倭における国家形成と古墳時代開始のプロセス」（『国立歴史民俗博物館研究報告』185，国立歴史民俗博物館，2014年2月），「7世紀後半の条里施工と郷域」（『条里制・古代都市研究』30，条里制・古代都市研究会，2015年3月）。

仁藤敦史（にとう あつし）

1960年生。早稲田大学大学院文学研究科満期退学。博士(文学)。国立歴史民俗博物館研究部教授・総合研究大学院大学文化科学研究科教授(併任)。

『卑弥呼と台与』（山川出版社，2009年），『古代王権と都城』（吉川弘文館，1998年），『古代王権と支配構造』（同前，2012年）。

上田長生（うえだ ひさお）

1978年生。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士(文学)。金沢大学人間社会研究域准教授。

『幕末維新期の陵墓と社会』（思文閣出版，2012年），「近代陵墓体系の形成——明治初年の陵墓探索・治定と考証家——」（『日本史研究』600，2012年），「陵墓と朝廷権威——幕末維新期の泉涌寺御陵衛士の検討から——」（『歴史評論』771，2014年）。